

Lingkaran

第5巻第4号 2008年4月15日発行
【毎月15日発行】通巻第28号

【心とカラダにやさしい生活】

リンカラン Vol.32 [4月号] 定価680円(税込)



未来をみちびく ちいさな芽生え

「三つ子の魂、百まで」という諺がある。
幼いころ身につけたことは、年老いても変わらぬ。
自分の毎日は、習慣で成り立っている。
その習慣が健全な社会をみちびくように、
幼いころから良い方向を見つめられるように。

撮影・清水信雄 (P.76-77)、アイア・イデス (P.78-79)
取材・文・井上真子 (P.76-77)、中野八重恵 (P.78-79)

ポタポタはしない

石けんで手洗いの間も蛇口を締める。最後には、水道の蛇口はしっかり締めてポタポタと水が滴らないように。雨水タンクのおかげで、水も限りあるものわかる園児もいる



● 日本編

京都市内にあるふつうの保育園。
「毎日」を積み重ねるなかで、
園児たちは、ちいさなことだけれど、
とても素敵な大切なことを身につけます



きつかけは、太陽光パネル。
「おひさま発電所」

京都市北区にある大宮保育園の屋上。「大宮おひさま発電所」と書かれた太陽光パネル60枚が、今日も輝々と注ぐ太陽の光を集めて電気に変えている。日照時間など季節に左右されることもあるが、園内の電気は最大10kW、年間の約9割をまかなう。太陽光パネルの下、園児たちは園庭をこころ楽しと、走り回る。

大宮保育園が太陽光パネルを取り付けようと思ったのは、NPO法人「きょうとグリーンファンド」との出会っていた。開園から30年以上経ち、若い職員も増えた頃、大切にしていたものが壊れたり、電気のつけっぱなし、水の流しっぱなしが目に入り、そして急激に水道代や電気代などが上がり、運営経費に北尾青子園長が悩んでいた頃だった。このNPO法人は、省エネ型の暮らしと社会を目指す、自然エネルギーの普及の活動をしている。「環境学習」という誘い言葉に北尾園長がひらめき、大宮保育園が「おひさま発電所」となったのは、2006年1月のことだ。その1年前の2005年から、職員をはじめ園児、その保護者たちと学習会を重ね、環境問題を知る機会をつくった。

太陽も雨も、限りある
自然の恵みから得る感覚

「おひさま発電所」がもたらしたものは、自然エネルギーについて考えるというだけでなく、想像をはかるか